

## 叶わなかった夢

熊本県立熊本聾学校

高等部普通科二年 今村 穂

聴覚に障がいをもっている僕には永遠に叶えられない夢があります。それは聴者になりたいという夢です。子どものころ、口話でやり取りする人たちを見て羨ましいなと思いました。母がママ友と楽しそうに話している時、僕は何もしないでただ話し終わるのを待つだけで、早く終わらないかなとつまらなく思うときもありました。それがショッピングの途中なら一人で店内を歩き回ることもできますが、カフェなどではずっと座ったままただじっとテーブルを見つめるだけ。本当に暇で話に加わりたいと思っても、相手が手話を知らなければ、きっかけさえつかめません。僕が聴者だったら、話に入ることもできるし、退屈もしないだろうと、そのころは障がいなんかいらなないと思っていました。

でも素直に思い返すと、僕が生まれて障がいがあると分かった母は泣いたそうですが、それでも僕のために手話を覚えてくれました。今ではもう余裕で何でも話すことができます。英語や韓国語を話せるようになりたいと思ったら、綴りを書いたり、リスニングや発音をしたりして覚えますが、手話は書いたり読んだりではなく手を動かして覚えるしかない、手で覚えるのはとてもすごいんじゃないかと思います。本当に母には感謝しています。僕が一番うれしかったのは小学生のいところが手話を覚えたい！と指文字の練習をしていることです。幼いながら一生懸命覚えてくれるので、そのことだけでも自分が生まれてきてよかったと実感するのです。彼が手話をマスターして僕と楽しく手話で話ができたら何よりも達成感を味わってくれることと思います。

地元の小学校と交流したことも楽しい思い出です。みんなが手話について、知りたい！話したい！一緒に遊ぼう！とたくさん来てくれてとても嬉しかったです。交流は少なくなりましたが、その時の友達は今でも顔を合わせると「よっ！」と挨拶したり話しかけたりしてくれます。

今はもう聴者になりたいと思うことはありません。最初は苦しくても、自分で努力すれば絶対に何か良いことは起こると信じています。それは仲間が支えてくれるからです。

社会では手話を覚えたいという人が増えています。「障がいのある人もない人も共に生きていく」という世界に変わりつつあるのかもしれませんが、でもまだ差別や偏見、いじめはなくなっていません。最近では新型コロナの影響で、町境、県境でぎすぎすした関係になっていたり、国同士でいがみ合ったりもしています。それは、国や地域の「いじめ」ではないかと思います。今こそ共に生きていくことの意味をもう一度しっかり考えなければいけません。

今の僕の夢は、障がいがあっても世界中の人たちが共に幸せに暮らせる社会の実現です。例えば手話を覚えていなくてもいい、身ぶりや筆談などを使って話しかけようとする人がいて、手話がろう者にとって大事なコミュニケーションであることを知り手話を覚えようとしてくれたら・・・手話だけでなく視覚障がい者への点字支援や声かけなど、障がいのある人に対してだけでなく、困っている人、支援を求める人に気づくことのできる社会、少しずつそんな幸せな社会になってほしいと思います。そのために僕ができることは、周りの人に手話の大切さや、自分の気持ちを話し、聴覚に障がいのある僕たちのことを少しでも知ってもらうことだと思っています。

ご清聴ありがとうございました。